

〈資 料〉

## アイドルの彷徨い

A Pop Star is Adapting to the Times

諸井 克英  
(Katsuhide MOROI)

### アイドルとは何か

「小泉今日子（'66年生～）」は、'82年に「私の16才」でシングル・デビューした。この年には「中森明菜（'65年生～）」や「シブがき隊（'88年解散）」など多くのアイドルが登場し、「花の82年組」と呼ばれた。ところが、小泉は'85年に『なんてったってアイドル』によって脱アイドル化をはかる。つまり、この歌でだれもが暗黙裏に承認していた「アイドル」像を唱導することによって、逆に「自己享楽」としての「アイドル」像を構築したのだ（A：「ミニのスカートひらりて男の子達の視線を釘づけ」、「ちょっとくらいは誰かにそよ私だと」、「イメージが大切よ 清く正しく美しく」、「いつもみんなにキャー・キャー言われ続けたい」）。彼女は、①自分自身を「こいずみ〈小泉〉」と呼ぶ、②独自のファッションを自ら取り入れる、③先端音楽の導入（「ハウスミュージック」）を図るなど、従来のアイドルからの逸脱を演じるのだ。

中森（2007）が指摘するように、アイドルはスターとは異なり、身近な存在である。映画産業を中心とした「スター・システム」を論じた Morin（1972）によれば、スターは「近寄りやすい星」から、「スクリーンという天と、地との仲介者」として機能するようになり、この進展によって、スターは、「神性を低落させ、スターと人間の接点を刺激し、増加させる」。しかし、他方でこの一連の過程がスターに対する「崇拜」を促進するのである。アイドルとは、いわば天上界からこの地上へと降りた存在であり、「崇拜」的態度が希薄化する分、現実存在として一般大衆との距離感が縮減しているのだ。

稲増（1993）は、わが国の第Ⅱ次大戦後におけるアイ

ドルの変遷を次のように象徴的に整理した。①「吉永小百合」〈まじめさ〉→'50年代的な戦後民主主義の具現化、②「山口百恵」〈ホンネ志向〉→従来のアイドル像に対する反抗、③「松田聖子」〈タテマエ志向〉→絶対的価値基準を喪失したシラケ状況の産物。先述した「小泉今日子」による脱アイドル化とは、「山口百恵」が示した〈ホンネ志向〉を強め、アイドル（あるいは女性）はかくあるべきという時代規範に対する「反抗」性よりも、経済的な高度成長の頂点に迫る'80年代の豊かさを背景とした先端的な「自由」に本質があるといえよう。

ところで、小城（2004）は、メディアを介して認知できる特定のファン対象に対する意識や行動に注目し、ファン対象を「直接的なコミュニケーションを持たず、主にマスメディアを介して知り得るタレント・アーティスト」と定義した。男女大学生に「好きなタレント・アーティスト」を挙げさせ、その対象に対する意識や態度を尋ねた。因子分析によって次の8側面が抽出された。①作品の評価、②疑似恋愛感情、③外見的魅力、④同一視・類似性、⑤ファン・コミュニケーション、⑥流行への同調、⑦尊敬・憧れ、⑧流行への反発・独占。小城はファン対象をアイドルに限定していないが、抽出された側面はアイドルにもあてはまる。

ここでは、わが国のグループ・アイドルに焦点をあてながら、アイドル創出の基底にある心理学的メカニズムを概観しよう。

### まとめてアイドル

'85年春に平日の夕方時間帯（午後5時～6時）にフジテレビは、『夕やけニャンニャン』（'85年4月～'87年8月）を放映し始め、この時間帯としては高視聴率を確保する。この番組の中で、素人の女子高校生を中心と

したグループ・アイドル「おニャン子クラブ」を編成し、男子中・高校生を中心に人気を得た。彼女らの人気を確固たるものにしたデビュー・シングル「セーラー服を脱がさないで」（'85年7月）では、性的に際どい歌詞が展開される（B:「嫌やダメよ こんなところじゃ」「キスから先に進めない」「全てをあげてしまうのは」「明日の外泊」「ちょっと怖いけど」）。つまり、女子中高生が自らの身体を価値化していく、意識水準での下地が形成され、「テレクラ・ブルセラ・ポケベル」という言語に象徴される'90年代「援助交際」現象へと引き継がれていく。つまり、「おニャン子クラブ」は、わが国における自己身体の価値に関わる変容に「寄与」したといえよう。宮台（1994）によれば、「おニャン子クラブ」は「無害な差異の記号としてパッケージ化された」「メディア主導の商品」にすぎなかった。宮台は、'90年代に出現した現象を、「理想（性的であってはならない）」と「現実（なのに性的）」という「近代学校教育制度」を前提とした「落差」に回帰させる。後述するAKB 48における「制服」の再利用は、この「落差」感覚をくすぐるのである。

この「おニャン子クラブ」は、もともと音楽的には素人水準であるがゆえに短命であった。これには、週刊誌などによって喫煙写真、恋愛沙汰や、人格批判など継続的にバッシングを受けたことも影響した（別冊宝島編集部、2008）。しかしながら、この番組自体の企画者である「秋元康」は、アイドルと聴衆との日常的距離をシステムの縮減を試み、大きな成功を得た。つまり、音楽的にも容貌的にも特別に自分たちと乖離していないアイドルを作り出したのだ。さらに、従来のグループ・アイドルは特定の固定化された成員から構成されるが、「おニャン子クラブ」というグループ・コンセプトを維持しながら、内部のユニット化（「うしろゆびさされ組」、「うしろ髪ひかれ隊」など）や成員の卒業・加入システムを創出する。「秋元康」は、アイドルのいわば「粗製乱造」（中傷の意味ではなく、兎にも角にも世間に曝して「アイドル」となり得るかどうかは大衆の「審判」に委ねるという意味）システムを考案したといえよう。

「おニャン子クラブ」のシステムは、'90年代終わりに「つんく♂」によって、「音楽性を保持したグループ・アイドル」システムとして部分的に再生される。テレビ東京が放映していたオーディション番組『ASAYAN』（'95年10月～'02年3月）で「シャ乱Q」の「つんく♂」が選抜した「モーニング娘。」である。初期成員は

5人であるが、「おニャン子クラブ」と同様にユニット化や卒業・加入システムを導入し、10名をこえる時期もあった。しかしながら、音楽アーティストである「つんく♂」により高い音楽性（歌と踊り）の点で「おニャン子クラブ」とは異なり今も高い人気を維持している。さらに、この「モーニング娘。」とは別に「つんく♂」が企画している女性音楽アーティストを含め全体を「ハロー！プロジェクト（Hello! Project）」（Berryz工房など）として展開を図っている。この「つんく♂」の試みは「ASAYAN」での選抜過程を視聴者に共体験させることにより、アイドルとの心理的距離の縮減化をもたらした。しかし、同時に、素人水準と乖離した高い音楽性の達成（志向）は逆に「おニャン子クラブ」以前のアイドルと重なる。

ところで、「おニャン子クラブ」で一世風靡した「秋元康」は、「テレビ番組」という居場所を「専用小劇場」に差し替えた形で素人集団のAKB 48をプロデュースした。つまり、「劇場でコアなファンを抑えて細く長く続ける」という戦略を採用し、「会いに行けるアイドル」を演出したのだ（田中、2010）。つまり、「アイドル」とファンとの距離をファン自身の意思によって縮減することを可能にしたのである。さらに、「秋元康」は入場料を低価格に抑えることにより「デフレ（物価下落）カルチャーや心（金銭の授受を伴わない非経済活動的な消費）の消費」（田中、2010）という時代の動向を巧みに利用した。このAKB 48は、次の段階を経て（村山、2011）、「前田敦子」の卒業セレモニー（'12年8月）という頂点に達した。①初期ファン獲得期（'05年12月～'06年3月）〈AKB 48劇場のオープン〉、②ファン基盤形成期（'06年4月～'07年12月）〈チームKとB結成〉、③ファン拡大期（'08年1月～'08年12月）〈初の冠番組、「大声ダイヤモンド」の成功〉、④本格展開期（'09年1月～'10年6月）〈全国展開、派生ユニット〉、⑤多面的展開期（'10年7月～）。村山（2011）は、各段階のファンの特徴をRogers（1995）のモデルと対応づけた。つまり、「イノベータ（①）→初期採用者（②）→初期多数派（③）→後期多数派（④）→ラガード〈laggard〉（⑤）」である（Rogers, 1995）。

AKB 48は単に「おニャン子クラブ」の複製ではなく、わが国におけるネットワーク社会の進行との連動という特徴をもつ。つまり、「専用小劇場」という対面的相互作用に加え、ネットワーク社会での非対面的相互作用がAKB 48の人気を加速した。「秋元康」は「小劇場」というベタな空間とネットという浮遊空間との結合を仕

組んだのだ(秋元(2009):「例えば劇場で「今日」何か起きたら、観ている人達が携帯で発信して、その情報がネット中を走り回る。」「AKBとファンがネットを通じて繋がっている。」。また、AKB 48の会員には「恋愛禁止」規範が課される。わが国の中学生から大学生までの男女の性意識や行動に関する全国調査を見ると(日本性教育協会, 2013; '74年から開始), 高校生や大学生の性行動は'80年代から活発化する(ただし, 最新の'11年調査では若干減少している)。「秋元康」は, 若者の性行動のこのような状況を背景として, 逆にAKB 48には「恋愛禁止」という, 通常考えればあり得ない規範を強制したのだ。この時代の推移と逆行した掟は性行動の虚構化をファンに起動させ, ファンとの心理的距離をいったん縮減したAKB 48をMorin (1972)のいう天上界へと回帰させるという巧みな方略が築かれたのである。

多人数アイドルであるAKB 48の場合, だれが中心になるかはファンにとって重要であるが, もともとは「秋元康」の『ゴリ押し』(濱野, 2012)によって「前田敦子」が「センターポジション」を占める。卓越した技量や外見をもたない「前田敦子」の中心化は, 「完璧ではない人間達が努力をして, 一生懸命やる。それをファンが応援する。」(秋元, 2009)という構図の象徴となるが, 同時に「前田敦子」に対する反感(=アンチ)を惹起した。この反感は「匿名で叩く下衆な快樂」(濱野, 2012)としてネット上で増殖することになる。「秋元康」はこのことを逆手にとり, 「総選挙」すなわちAKB 48成員の序列をファン自身が決定するイベントを企画した。しかも, この選挙権はCDの購入枚数と連動する。一見すると「金権選挙」の様相(=ファン心理を利用した搾取)を見せながら, 実はファン自身が序列を決定できるという奇妙な仕組みが生じた。しかし, この仕組みは, 決定への関与効果により次の現象が生じた。「市場競争において淘汰され埋もれてしまうメンバーを, ファンの団結によって押し上げようとする, 『共同体』の力」の創出である(濱野, 2012)。

このように, 「アイドル」とファンとの間の対面的相互作用(小劇場, 握手会)とファン同士の非対面的相互作用が融合し, 「ネット上での批判にかかわらず『自分を応援してくれる人がいる』」(濱野, 2012)という実感が「アイドル」成員に生じ, '11年の「第三回選抜総選挙」でトップに返り咲いた「前田敦子」の印象的なセリフ(「私のことは嫌いでも, AKBのことは嫌いにしないでください」となる。「秋元康」によって創案されたAKB 48というシステムは, 「おニャン子クラブ」がTV

メディアを「OS(コンピューターのオペレーティング・システム)」=「場」として「化学反応」させたアイドルとすれば, まさにインターネット社会自体を「OS」としたアイドルなのだ(秋元(2009):「女の子は“かたまり”になると化学反応を起こす。」「AKB 48っていうのはLinuxなんですよ。」「みんながそのOSをバージョンアップして, お互い共有しようというのが理想なんです。))。

## 男性グループ・アイドルの進化

'62年に「ジャニー喜多川」によって設立されたジャニーズ事務所は, '64年に4名の男性から構成される「ジャニーズ」をレコード・デビューさせて以来('67年解散), 現在に至るまで多くの「ジャニーズ系アイドル」を創出した。「ジャニー喜多川」は, ①米国流ショービジネス化と②新進作家の起用を志した。①については, 「歌って踊れる」少年から構成されるグループを次々と登場させた。②は制作者(=レコード会社)による特定の作詞家や作曲家との専属契約(囲い込み)を壊す試みであった。このいわば「ジャニーズ系アイドル」システムは先述した「秋元康」や「つくくろ」によるシステムよりも長い歴史をもつ。さらに, ジャニーズ事務所所属アイドルに関する種々のスキャンダルを孕みながら(ジャニーズ研究会, 2008), 今なおわが国のアイドル創出システムの重要軸となっている。また, このシステムでは, ファンからの支持がある限り当該グループを存続させるので, 30・40代になってもアイドルである。この点で, ファンがグループ成員の「成長」を共同体験するシステムといえよう。

ジャニーズ系アイドルのファンの特徴を分析した辻(2007)によれば, もともとアイドルが表出する「歌詞の内容やその表象」に基づき「ここではないどこか」をファンは夢想する。つまり「超越性の快樂」を経験する。しかし, ジャニーズ系アイドルの場合には「関係性の快樂」を喚起する。つまり, 歌詞内容よりも「自分とアイドルの関係, さらに自分と他のファンとの関係における満足」が重要なのである。そのため, 辻によれば, 「自分とアイドルとの関係の安住さ」をはかるために, 「噂」という形での他のファンへの間接的攻撃(=『怪文書』)が生じがちになる。これは, 「異性へのアピールやファッションに関して他者と競争する自信」の欠如によって促進される。

女性芸人・松本(2005)は, ジャニーズ系コンサート

への「だめ出し」や事務所の方針・戦略に対する分析「ジャニヲタ」を自称する。彼女はファン心理の特質として、「も～お、男子ってばバカなんだからあ！ プンスカ！ でも笑顔！」という「ユニ萌え」を指摘する。女子が「教室で男子同士がアホなこと言いながらキャイキャイやっているのを」観察する心理的メカニズムに通じるのだ。「関係性の快樂」がグループ成員同士の「仮想」された関係に転移する。少年グループ・アイドルのシステムは、コミックや小説におけるBL〈Boys Love〉ブームの文化的拡大であるいわゆる「腐女子」現象の「ジャーニー喜多川」による予見に基づくともいえよう。

上野(2007)が指摘するように、「腐女子」現象とは、わが国における男女平等化の進展と裏腹の関係にある。つまり、男女平等化の進展は、同時に「裏」としての性別隔離文化(「男子」と「女子」の区別)の発展を孕んでいる。一方に「オタク」文化、他方に「腐女子」文化である。後者は、女性によって支えられ、「男子」との境界の明確化することにより、男女平等化に抗して男性との同一化を拒否し、男女平等化圧力からの解放を図る。「どうせ私は『腐女子』」、「男を相手にしない『腐った女』」と自己定義することによって、そもそもの男性視線を回避するのだ。

## おわりに

遠藤(2010)によれば、現代文化の動向は「フラット・カルチャー」として特徴づけることができる。「フラット・カルチャー」とは、次の3側面から構成される。①さまざまな文化形象が分厚く蝟集し、とくに強い価値的なヒエラルキーを伴うこともなく併存することが構成する実在感。②諸領域を平板にサーフィンできてしまうことが発生させる、横並びをあてにしたある種の感覚の成立。③かかる併存の事実性が社会の領野にもたらす、複数の効果の広がり。このような「フラット・カルチャー」化は、音楽視聴にもあてはまる。

阿部(2010)は、「J-POPに特有なフラットさの存在」を携帯電話機やインターネットによる音楽配信サービスが促進していることを指摘した。音楽配信からの購入に際して自分流に楽曲を収集しカスタマイズすることにより、もともとの楽曲のもつヒエラルキー的存在意義を超え、スタイルの共有としてのコミュニケーション手段として機能させてしまうのである。

前述したような「秋元康」のAKB 48戦略は、「フラット・カルチャー」化を巧みに利用したものであるし、

たとえば、アイドルにとって「Twitter」や「You Tube」によりファンを獲得し維持していく戦略は今や常識である。これは、Morin(1972)が説いた天上界の「スター・システム」ではなく、インターネット等を介したアイドルとの心理的距離の縮減を図る道具立ての普及による「フラット・カルチャー」化の結果でもあろう。つまり、当該の時代に優勢となる文化-社会的枠組みに敏感に読み取ることができる者が、アイドル創出作業を継続できるのである。「秋元康」は、社会の表層で顕著な形で優勢となったインターネット文化と、社会の深層で蠢くオタク文化とを予見的に見事に融合させ、AKB 48の成功を獲得したのだ。

## 引用文献

- 阿部勘一 2010 J-POPほどフラットなカルチャーはない 遠藤知巳(編)『フラット・カルチャー-現代日本の社会学-』せりか書房 146-153頁
- 秋元 康 2009 ロングインタビュー Quick Japan, 87, 72-77.
- 別冊宝島編集部(編)2008『70～80年代アイドルスキャンダル事件史』宝島社
- 遠藤知巳 2010 フラット・カルチャーを考える 遠藤知巳(編)『フラット・カルチャー-現代日本の社会学-』せりか書房 8-49頁
- 濱野智史 2012『前田敦子はキリストを超えた-〈宗教〉としてのAKB 48-』ちくま新書
- 稲増龍夫 1993『増補 アイドル工学』ちくま文庫
- ジャニーズ研究会(編)2008『[[完全保存版] ジャニーズの歴史-光も影も45年-』鹿砦社
- 小城英子 2004 ファン心理の構造-(1) ファン心理とファン行動の分類-人間科学(関西大学大学院) 61, 191-205.
- 松本美香 2005 ジャニヲタ天国? 地獄変? 〈ユリイカ 特集 文化系女子カタログ〉ユリイカ 37(12), 185-195.
- 宮台真司 1994『制服少女たちの選択』講談社
- Morin, E. 1972 *Les Stars. Editions du Seuil*. 渡辺淳・山崎正巳訳『スター』1976 法政大学出版局
- 村山涼一 2011『AKB 48がヒットした5つの秘密-ブレイク現象をマーケティング戦略から探る-』角川書店
- 中森明夫 2007『アイドルにつぼん』新潮社
- 日本性教育協会(編)2013『[[若者の性]白書-第7

- 回青少年の性行動全国調査報告-』小学館
- Rogers, E. 1995 *Diffusion of innovations. 5th edition.*  
Free Press. 三藤利雄 (訳) 『イノベーションの普及』翔泳社
- 田中秀臣 2010 『AKB 48 の経済学』朝日新聞出版
- 辻 泉 2007 関係性の楽園／地獄-ジャニーズ系アイドルをめぐるファンたちのコミュニケーション- 玉川博明他著『それぞれのファン研究-I am a fan-』風塵社 243-289 頁
- 上野千鶴子 2007 腐女子とはだれか? -サブカル
- ジェンダー分析のための覚え書き-〈ユリイカ  
特集 腐女子マンガ体系〉ユリイカ 39(7), 30-36.
- [音源]
- A: 『KYON3 KOIZUMI THE GREAT 51』VICL-61038  
〈'02 年〉
- B: 『ザ プレミアムベスト おニャン子クラブ』  
PCCA-3743 〈'12 年〉

(2013 年 11 月 20 日受理)